プラグマティズムと ピューリタニズムのエートス

山室　吉孝

問題の提起

プラグマティズムはアメリカで誕生した唯一の哲学であり，アメリカを代表する哲学でもある。一方モリソン（S. E. Morison）が「ニューイングランドに植民がなされたのは，ピューリタニズムのためであった。そして会衆派，長老派，メソジスト，バプテスト，ユニテリアン，クエーカー，その他の合衆国プロテスタント諸派は，十七世紀イギリスおよびスコットランドのピューリタニズムの分派であるから，ピューリタン的な考え方や行動方式が，アメリカ精神と国民性に広大な影響を及ぼし，ふつうプロテスタント倫理と称されているものの先駆となったことは驚くにあたらない。[(1)]」と主張するように，ピューリタニズムの伝統もアメリカにおいて重要な意味を持つものなのである。

こうしたアメリカを代表する哲学であるプラグマティズムとアメリカにおいて重要な意味を持つピューリタニズムの伝統との関係はいかなるものであろうか。プラグマティズムはピューリタンがアメリカに初めて宗教的共同体を築いたマサチューセッツの一部であるケムブリッジで生れ育ったものである。

鶴見俊輔氏が指摘するように「プラグマティズムは…中略…清教徒文化の中心地において，清教主義の道徳的伝統をせおって生まれ，清教徒の子孫によって育てられた[(2)]」のであるとするならば，この両者は無関係のものではあり得ない。しかしプラグマティズムとピューリタニズムとの関係は，これま

でどのように理解されてきたであろうか。

一見するとプラグマティズムの思想からあの厳格な生活信条を固執するピューリタニズムの信仰を想起することは難しいであろう。このときプラグマティズムがピューリタニズムから何らかの影響を受けているにしても，それは否定的にであって肯定的になされてはいないと考えられるかもしれない。しかし否定的にだけではなく肯定的にもピューリタニズムの影響を受けずしてはプラグマティズムの成立はありえなかったと，とらえることは果して不可能であろか。

もちろんプラグマティズムの成立におけるヨーロッパ思想の影響を無視することはできない。しかしそれにもかかわらずアメリカで生まれた土着の思想であることを忘れてはならないであろう。

プラグマティズムには外来思想の影響を受けながらも，アメリカ独自な特徴が，それも「宗教的」な特徴が見られるのではなかろうか。

一九世紀後半になると科学の進歩が目覚ましく，アメリカ思想史において宗教と科学との葛藤は大きな出来事になった。これとの関連においてプラグマティズムを見ると確かにW. ジェイムズは「有用性」（usefulness）による実際の行動の検証によって超自然的なものやそれにかかわるものの意義を明らかにしようとするし，C. S. パースはジェイムズ以上に科学的な論理性を重視するにもかかわらず，宗教を完全に否定することはしない。またJ. デューイは既成宗教を否定するものの，既成宗教から「宗教的なもの」（the religious）を取り出し，それを「純粋に宗教的なもの」としている。(3)

こうした見方をすれば鶴見俊輔氏がプラグマティズムの「功利主義的展開は，われわれの生活における美的・倫理的・宗教的価値が，科学の主張とどうしたら調和されるかという問題を解決しようとしたものである。」(4)との主張は妥当なものであるように思われる。つまりこのことから，プラグマティズムと宗教を単純に切り離してはならないように思われるのである。

確かにアメリカにも時代と共に初期に見られたピューリタニズムの信仰が薄れるという，いわゆる宗教の「世俗化」（secularization）の現象が見ら

れた。しかしこれに対したびたび「大覚醒」(the Great Awakening)のようなピューリタニズムの信仰を復興させようとする運動が巻き起こるのである。また正統派の流れからは逸れてくるが，社会的な風潮の要求に従ってピューリタニズムを修正し，発展させようとしたユニテリアン派やエマーソンが参加した超絶主義(Transcendentalism)などの運動も見られたのである。そこでこれらと同じ流れをくむ運動の一つという角度からプラグマティズムを考えることはできないだろうか。

ところでピーリタニズムの教義や信仰内容とプラグマティズムの思想を比べると，表面的にはまったく違ったものであるように思われる。そのため私自身，プラグマティズムの思想はもはや初期ピューリタニズムの宗教的枠組みからは逸脱しているものであると考える。ただし初期ピューリタニズムの宗教的枠組みからは逸脱していると考えるにしても，ピューリタニズムの宗教以外からは考えられないような特徴がプラグマティズムには見られるのである。詳しく言うならば，プラグマティストの思想なり行動なりを意識的，無意識的に規定した内発的誘因，すなわち動因(drive)あるいは動機(motive)の基盤に，ピューリタニズムの宗教的影響が残っているように思われるのである。M.ウェーバーの用語を用いるならば，プラグマティズムにピューリタニズムの「エートス」，すなわち宗教が人々の思考様式や行動様式に及ぼした精神的な起動力が示されているように思われるのである。

この場合注意しなければならないことは，ここではプラグマティスト達がピューリタニズムの影響を受けているかどうかが，意識的であるか，無意識的であるかは問題にしない。なぜなら人間の行動様式や思考様式というものは，必ずしもすべて意識的にあるいは自覚的に規定されているということはありえないからである。そのためここでは必ずしも意識的，自覚的な事柄だけを扱うつもりはない。確かに無意識の精神構造は論理的なものではない。しかしフロイト以来明らかにされてきたことは，無意識の精神構造が論理的なものではないことと同時に，意識的なもの以上に我々が無意識なものによって支配されているという事実である。「人生にとって論理的な考えは欠く

ことができない。今日の人類にとって，科学は環境へ適応するもっともすぐれた方法となった。しかも人生すなわち科学ではない。行動は論理ではない。われわれに力を与えるものは，しばしば無意識の世界の，暗い考え方である。(5)」

以上から，このような問題は超越的な神やそれに基づく宗教の教養や信仰内容などの議論で解決することは不可能である。そこでここではこのような議論は問題とせず，あくまで宗教が人々の思考様式や行動様式に及ぼした精神的な起動力，すなわちエートスと，そこから生まれた社会形成論という観点とを中心に考察したい。したがってプラグマティズムにピューリタニズムの宗教的教義や信仰内容が受け継がれているかどうかといった問題は，ここでは一切扱わない。ここで問題とすることは，ピューリタニズムの宗教的な背景から生じたと思われるピューリタンの精神的な特徴が，プラグマティズムに反映しているかどうかということなのである。

客観的，具体的な事柄だけから判断したのでは，人間の精神的，心理的内面の働きを切り落してしまうように思われる。それゆえ客観的，具体的な事柄も重視しなければならないが，そこから類推できる事柄から判断していくことも重要であるように思われる。確かにこの場合個人の意識，すなわち主観的な判断が入ると思われるが，どんな客観的な分析を行なったとしても，そこに何かしらの主観的な判断が入らざるをえないように思う。

例えば，キリスト教の素養がない儒教徒であるならば，キリスト教的意味合いを持った記述を無意識のうちに見過してしまうことも，あるいは無意識のうちに儒教的に理解してしまうこともあろう。特に宗教というものは無意識のうちに精神構造の中に入り込み，個々人の価値観を決定的に左右することがある。(6) 伝統的に宗教的な色彩の強い環境で形成された思想であるならば余計に表面に現われたものだけでなく，その根底に根ざす宗教的なものの理解なしにはその思想を正確に理解できないように思われるのである。

ところで今回紙数の制限のためやむをえずピューリタニズムのエートスを明らかにするだけに留めたい。

1．ピューリタニズムの起源

一般的には「ピューリタン」という言葉はイギリスのエリザベス朝時代に，国教会に反対し改革を求める人々に対して付けられた呼び名であるとされている。しかしながらピューリタニズムに対する概念は多種多様である。

そこでここではM．ウェーバーの論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で用いられている概念を前提にする。すなわち一七世紀のオランダやイギリスで発生した「禁欲的傾向をもった宗教上の諸運動で，教会制度上の綱領や教理の差異を問わない」広義のものである。(7) このためピューリタニズムの分派には，長老派，会衆派，独立派，メソジスト，さらに再洗礼派系のメソナイト，クエーカー派までも含まれる。

ただウェーバーの立場と基本的には変わらないのではあるが，最近のピューリタニズムの研究を若干考慮していくつもりである。

ところでピューリタンは元来カルヴィニズムの流れを汲むプロテスタントである。最初ピューリタンはカトリック教徒であるメアリー女王（Mary Tudor 1516～58）の反動的な宗教改革の迫害から逃れるため，イギリスからジュネーヴやラインランド諸都市に亡命していた。そこで彼らはカルヴィン（Colvin, Jean 1509～64）によって引き起された宗教改革の影響を受けたのである。このためエリザベス女王（Elizabeth I 1533～1603）が即位し，プロテスタントに対する弾圧が弱まると，彼らはカルヴィンが始めた宗教改革通りに本国においても聖書に従って宗教改革を行なおうとしたのである。

ところが最初はエリザベス女王はピューリタンの宗教活動は認めていたものの，いずれはすべての教会を国王の権威の下に統合し，イギリス国教会を再興させようと考えていたのである。このためあくまで聖書に基づく純粋な教会を主張するピューリタンは危険分子として徐々に弾圧されていったのである。

こうして当時ピューリタニズムの主流であった長老派のすべての国民を包括する国教会それ自体は否定せずにイギリス国教会の在り方を改めようとし

た試みは断念せざるをえなかったのである。これに対し長老派から分裂した会衆派は，「契約の思想」の立場に立ち，純潔な「聖徒」（saint）以外の人々も含み込む国教会的な考え方に反対し，純潔な「聖徒」が契約によって結びついた「聖徒」のみの教会の建設を考えた。この場合の「聖徒」はカトリックの意味する聖人を指しているのではない。真の信仰を自覚的に遵奉する信者になら誰にでも与えられたのである。

ピューリタン革命やニュー・イングランドの植民地の建設で中心的な役割を果したのはこの会衆派である。ところで正統的カルヴィニズムの立場を継承している長老派は，この会衆派の立場を否定する。なぜならカルヴィニズムの予定説によれば，救いを得られる者はあらかじめ神に救われることを予定されている。ただし誰が神に救われているかは人間には見分けがつかないとされているのである。そのため会衆派のように自らを「聖徒」と称し「聖徒」だけの教会を建てるというのはカルヴィニズムに反することなのである。

ウェーバーも「カルヴァンは神に捨てられた者をも教会の聖潔な制度の下に服させることが，神の栄光にふさわしい唯一のことと考えていた。が，ニュー・イングランドでは，救いの証明をおえた聖徒の貴族主義という姿で教会を樹立しようとするようになった。」[(8)]として，正統的カルヴィニズムとニュー・イングランドのピューリタンの立場が異なることを認めている。ただしウェーバーは同時にこうした「聖徒の貴族主義」を導き出す思想は，「初めから存在した」もので，「しだいに熱情的に強調されるようになった」ものだともしている。[(8)]

ところでここで注意すべきことは，ウェーバーがピューリタニズムをカルヴィニズムの予定説から中心に論じている点である。

ニュー・イングランドの植民地で中心的な役割を果したのは会衆派である。そのためアメリカにおけるピューリタニズムを論じるためには，カルヴィニズムの予定説とともに会衆派の「契約の思想」も考察する必要がある。そこでウェーバーのピューリタニズム論を中心には置くが，適宜「契約の思想」も考察していきたい。

ウェーバーによれば，カルヴィニズムの予定説とは永遠の昔から我々人間は神に救われているかどうかが決められているとするものなのである。そのためいかなる信者ももはや「説教者」にも，「聖礼典」にも，「教会」にも，そして「神」さえにも頼ることはできないと考えられた。[9] つまり個々人が神に救われていると信じ，ひたすらその証明に努力するしかなかったのである。

このことは「契約の思想」からも説明しえる。この思想によれば，人間は神との契約関係が結ばれることによって神の救いが得られるものとされている。ただし人間が一方的に神と契約関係を結ぶことはできないのである。この契約関係が結ばれるには神の恩寵の力が必要なのである。この場合の恩寵の力とは「ピューリタンにとっては，罪人にして無力なる人間をば神との契約のパートナーとして確立するところの力なのである。[10]」こうしてピューリタンは「神との契約のパートナー」として相応しい存在であることを証明するために限りない努力をするのである。

ところでピューリタンは神に救われているということをどのように証明しようとしたのだろうか。ウェーバーによれば，神に選ばれた者は「神の栄光を増す」ように務めなければならなかった。しかも公共に役立つ行為によって証明しなければならなかった。ピューリタンにとって「神の栄光を増す」行為とは，目に見えるインデックスとしては現世での人類の「実益」の為に役立つ行為と同じ意味を持つと考えられたのである。[11] さらにいくつか取られた行為の中の一つが，「善き行為」であったとしてもそれは意味がない。取られた行為すべてが「善き行為」でなければならなかったのである。すなわち「カルヴィニズムの神がその信徒から要求したものは，個々の『善き行為』ではなくして，組織にまで高められた聖潔な生活[12]」であった。

以上の理由からウェーバーはピューリタンの「現世の生活が地上に神の栄光を増すという観点によってひたすら支配され，徹底的に合理化されることとなった[13]」と主張するのである。この場合の「合理化」とはピューリタンの「究極の価値」である「聖書に直接に啓示された，或いは神の造りたまうた世界の合目的的な秩序（自然法）から間接に認められる神の意志[14]」に合致す

るように対象を論理的に決定づけ，位置づけるという意味である。つまりピューリタンは聖書の啓示だけからではなく，自然科学者によって発見された自然界の法則からも，神の意志が導き出せると信じていたのである。(15)

ピューリタンはこの「合理化」によって，「人間的なもの」すなわち人間の持つ感情や衝動，人間に対する権威を排除し，一日の終わりにその日の行為がどれだけ「神の栄光を増す」神の意志に適ったものであったかを絶えず自己審査したのである。神の意志に適う行為とはいかなる「人間的なもの」に因われたものであってはならなかった。これらを徹底的に排除する態度は，ピューリタンの「被造物神化」の拒否から出て来るものである。(16)

ピューリタンは神を絶対視する。そのために神以外のものの絶対化を徹底して排除するのである。

ところでこうした「神の救いの証明」によってピューリタンの厳格な生活態度が形成されていったのであるが，同時にピューリタンの中に自分達のみが選ばれた者であるとする「宗教的貴族主義」が生じたのである。(17) つまり元来カルヴィニズムの教会は神の救いに選ばれた者と共に選ばれていない者をも所属させるが，いつどのような神の救いの体験をしたかといった回心体験を客観的に証明されうる者だけの教会を作ろうとする教派（ゼクテ）が出てきたのである。会衆派のピューリタンは「聖徒」以外の人，すなわち神に救われている者以外の人と交わることを嫌ったのである。確かにカルヴィニズムも客観的にも見分けのつく神の意志にかなう行為を要求したが，会衆派はさらに回心体験も要求した。しかもそれによって教会員の選別も行なったのである。会衆派は教会員を客観的に見分けのつく「見ゆる聖徒」（a visible saint）に限定したのである。

以上からピューリタンが個人的な欲望にとらわれたり，ある特定の個人に忠義立てしたり，またいかなる人間の権威にも屈したりしなかったが理解できる。

結局こうしたピューリタンの態度が個人を縛っていた古い教圧や古い因習を克服し，一個の独立した自覚的な主体を作り上げていったのである。もち

ろん古い教圧や古い因習に固執する社会から抜け出た自覚的な信仰者達は，個人個人がバラバラのままであったわけではない。彼らは自立した個人として自己を確立するだけではなく，自発的に信条を同じくする自覚的な者同志からなる集団を形成していったのである。

ところでニュー・イングランドに最初に植民地を建設したのは，こうしたピューリタンの集団なのである。彼らはピルグラム・ファーザーズ（Pilgrim Fathers）と呼ばれ，プリマスに植民地を建設した。しかしプリマスの植民地は1691年にマサチューセッツの植民地に併合されたのである。結局はプリマスより10年後に建設されたマサチューセッツの植民地が中心となってニュー・イングランドは形成されていったのである。

プリマスの教会は会衆派の中でも分離派に属し，マサチューセッツの教会は会衆派の非分離派に属していた。分離派はイギリス国教会を否定し，そこからの完全な分離を主張した。それに対し非分離派は長老派と分離派の中間に位置し，イギリス国教会からの宗教的な独立は主張するが，国教会を否定せず，制度上の従属は認めるのである。そのため分離派のプリマスのピューリタンが自分達の信仰を守ることに主眼を置いていたのに対して，マサチューセッツのピューリタンはさらに自覚的な信仰者達による教会を中心とした新しい共同体社会を作ろうとしたのである。

マサチューセッツのピューリタンがニュー・イングランドへ渡って来たのも，ニュー・イングランドに人々が模範として仰ぎ見る「丘の上の町」，すなわち聖なる共同体を建設することを神に選ばれた者の使命と考えたからなのである。このことはマサチューセッツの植民地の初代総督，ウィンスロップ（John Winthrok，1714〜1779）の最初の説教に明確に記されている。(18)

ところでイギリス国教会は教区の者全員を強制的に教会に入会させた。それに対しマサチューセッツのピューリタンは回心体験のある者，すなわち「聖徒」から成る教会こそ純粋に聖書に定められている教会であると理解した。さらにこのような教会を中心に形成される共同体社会も，こうした「聖徒」に統治されるべきであると考えた。このため一般には当時マサチューセ

ッツで取られた政治形態は神権政治（theocracy）と呼ばれる。ただし教会と政府は役割別には分離していたのである。政府も教会と同様に神の意志に適う行為，すなわち回心体験を持つ「聖徒」による聖なる共同体建設の実行が前提とされたが，教会の聖職者が直接政治に参与することはなかったのである。

こうして「聖徒」の自発的で，主体的な聖なる共同体の統治が一見順調に行なわれたかに見えた。ところが第二世代目あたりになると回心体験を証明できる者が少なくなってきたのである。その結果，回心体験のない者でも，すなわち「聖徒」であると証明できない者でも信仰を告白し，教会の倫理基準に服従すれば，教会員資格が認められるようになり，徐々に初期のマサチューセッツのピューリタンの試みである「見える聖徒」による共同体建設の様相は変化せざるをえなくなっていた。

また1684年のマサチューセッツの特許状の取り消しと相まって，さらにこの傾向は強まった。しかしながら初期マサチューセッツのいわゆる神権政治が崩壊した後も，マサチューセッツのピューリタンが抱いていた使命観の意識は形を変えながらも，アメリカ人の精神に長く跡を残していくのである。これについては，またの機会に詳しく論じるつもりである。

まとめ

私はイギリスで起こり，初期ニュー・イングランドのマサチューセッツで支配的位置を占めたピューリタニズムを概観した。その結果，早い時期からピューリタニズムの変容の兆しが見受けられた。事実歴史的に初期のピューリタニズムの信仰は薄れ，変容していく。しかしながら後々までも初期のピューリタニズムの影響以外には考えられないものが，アメリカの人々の思想の中に見受けられるのである。それらの歴史的な概観はあとの機会に譲り，ここでは結論として最後にそれらをまとめたいと思う。

(1) 第一に，真偽認識に実際的な行為を重視する態度である。先にも述べたが，ピューリタンは神の救いに選ばれているかを実際の生活の行為によっ

て証明しようとしたのである。バックスター（Baxter）によれば，「信仰とは心と行為とによるキリストへの服従である」としている。[19] またウェーバーは「17世紀の経験論は禁欲思想にとって『自然における神』を探求するための手段であった。それは人を神に導くが，哲学的思索は神から離れしめると考えられた」のである。[20] さらにウェーバーによれば，アメリカに実業教育が発達したのも，結局はこうしたピューリタニズムの影響が残っているからであるとしている。

(2) 次に真理探求に合理性（reason）を重視する態度である。ピューリタンは神の救いを証明する上で，神の意志に適った行為を行うことが重要な意味を持つ。そのために行為が神の意志に適っているかを判断することは重要なことだった。ピューリタンはその判断を合理的な方法を用いて行なったのである。

もちろんこの場合の「合理的」な方法とは近代合理主義の没価値的な合理性を求める科学的な方法，すなわち「目的合理的」な方法ではなく，聖書の啓示にいかに適合しているか論理的に位置づけるという，「価値合理的」な方法という意味である。しかしここには聖書の啓示以外には，意味のなくなった風習とか迷信などに従わず，また神秘的，感情的なものに或わされずに，人間の理性に備わった自然界の事物を認識する能力によって論理的に認められるものを重視していく態度も見られるのである。こうした態度があるからこそ結局「数学や論理学や自然界における斉一性の関係，すなわち法則がはじめて発見されたとき，そのあまりの明瞭さ，美しさ，単純さに魅了されて，ために人々は全能なる神の永遠の思想を誤りなく判読しえたものと信じ，」[21] 聖書の啓示ばかりでなく，経験科学をも重視するようになったのである。

こうして最初ピューリタンは聖書の啓示と科学の示す真理を両立させようとしたのである。ところが科学の発展が著しくなるにつれて，科学の示す内容と聖書の啓示との間に食い違いが現われてきたのである。そのため科学を受け入れずに聖書の啓示だけに固執しようとするものや，反対に聖書の啓示の今までの解釈に囚われずに自由に科学的な解釈を取り入れていこうとする

ものが現われてきた。

(3) 人間が導き出した真理の絶対化を嫌い，真理探求に不断の努力を行う態度。

ピューリタニズムにおいて絶対なるものは唯一超越神のみである。そのためピューリタンは神以外に絶対なるものは認めないし，また自己も含めて神以外のものを絶対化しない。しかも人間には真理である神を捉えることはできず，結局人間は相対的で断片的な真理はつかめても，絶対的な真理はつかめないと考えたのである。ただそれにもかかわらず神の救いに選ばれていると信じる者は神の意志に適う行為を取らなくてはならない。選ばれた者は真理である神の意志に適う行為が取れると考えられたからである。

こうしてピューリタンは安易に妥協したり屈服したりせず，今だ確かめられない絶対的な真理を目指して，ひたすら不断なる探求の努力を繰り広げるのである。

(4) 次は外側からの権威的強制を排除し，個人の自発性や主体性を重視する態度。

先にも述べたが，ピューリタンは超越神を唯一絶対なるものとする。そのため徹底して「被造物神化」を拒否する。ピューリタンはすべての人間を神の下に平等に位置付けるのである。教皇であろうが，一信者であろうが，強いては君主であろうが，一農民であろうが，それだけでは本質的に区別されることはないと考える。しかもピューリタンは単に神に依り頼むということはしない。神に選ばれた者は神の思寵の力によって神の意志にかなう行動を取る能力を授けられると考えるのである。

こうしてピューリタニズムの信仰は神以外の人間のいかなる権威もあらゆる呪術的方法も一切排除し，神のみを信じ自分で自分を律し，この地上においては他者の支配を受けずに自分の力で生きていく自律的で，自立的な個人を生み出したのである。

(5) 最後に社会的組織に積極的に参加し，共同体社会への貢献を重視する態度。

先にも述べたが，ニュー・イングランドで主流となった会衆派のピューリタンは神に見捨てられた者をも入会させる教会に反対し，神に選ばれた者のみの教会を作ろうとした。つまりピューリタニズムは人々を実践的，心理的に伝統主義的な束縛から解放させ，自律・自立への道を歩ませたばかりでなく，同時に一見相反することのように思われる教会を中心とする共同体形成にも駆り立てたのである。正統派のカルヴィニズムの教理から判断しても「救いのためには神の規律に合致する共同態に加入することが必要である」[22]ことは理解できる。しかし更に大事なことはピューリタンが自己の神に救われていることの証明の必要から共同体への貢献に実践的，心理的に駆り立てられたということである。つまりピューリタンにとって神に救われていることの証明に必要な「神の栄光を増すため」の活動とは，教会を中心とする共同体に参加し，神の意志にかなう共同体形成に貢献することだからである。

ところでウェーバーによれば，こうした「カルヴィニズムにおける共同態形成の傾向は，まさしく，神の規律の下にある教会という姿をとったさまざまの型の共同体の外側でも，つまり『世俗』内ででも，生じたものである。」[23]

＜註＞

(1) サムエル・モリソン著，西川正身翻訳監修，『アメリカの歴史』，第1巻，集英社，1970年。／S. E. Morison, *The Oxford History of The American People.*

(2) 鶴見俊輔著，『アメリカ哲学』，上巻，講談社学術文庫，1976年，12頁。

(3) J. Dewey, *A Common Faith*, Yale University Press, New Haven, 1952, p. 2.

(4) 鶴見俊輔著，『アメリカ哲学』，下巻，講談社学術文庫，1976年，21頁。

(5) 宮城音弥著，『新・心理学入門』，岩波新書，1983年，68頁。

(6) R. N. ベラー著，葛西実・小林正佳訳，『宗教と社会科学のあいだ』，未来社参照。

(7) マックス・ウェーバー著，梶山力・大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，下巻，岩波文庫，1979年，11頁。

(8) 同書，105頁。

(9) 同書，26頁。

(10) 大木英夫著，『ピューリタニズムの倫理思想』，新教出版社，1970年，183頁。

(11) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，下巻，36頁。

(12) 同書，69頁。

(13) 同書，70頁。

(14) 同書，55頁。ここに見られる「自然法」の概念は中世の用語の意味で使われている。すなわち本来「自然法」は人間の理性だけでなく，キリスト教の倫理と不可分の関係にあった。それは理性に反するものであってはならないと同時に，神の摂理に反するものであってもならなかった。ただし「自然法は，キリスト教的立場から見て他の方法では解決できないとか存在しないように見えた問題を，解決するための手段であった。」(A. P. ダントレーヴ著，久保正幡訳，『自然法』，岩波書店，1980年，67頁)。

(15) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，下巻，125頁。

(16) 同書，37～40頁。

(17) 同書，80頁。

(18) J. Winthrop, A Modell of Christian Charity, Vaughan, A. T. ed., *The Puritan Tradition in America*, vol. Ⅱ, Harper & Row, 1972.

(19) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，下巻，59頁。

(20) 同書，126頁。

(21) William James, **Pragmatism**, Harvard Univ. Press, 1975, p. 47.

(22) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，下巻，37頁。

(23) 同書，38頁。

＜参考文献＞

(1) Perry Miller, *The American Puritans* : Their Prose and

Poetry, New York, Doubleday Anchor Books, 1961.

(2) Perry Miller, ***The New England mind*** : the Seventeenth Century, Cambridge, Mass., Harvard Univ. Prese, 1965.

(3) アラン・シンプソン著，大下尚一・秋山健訳，『英米に於けるピューリタンの伝統』，未来社，1977／Alan Simpson, ***Puritanism in Old and New England***, The Univ. of Chicago Press, 1955.

(4) 柳生望著，『アメリカ・ピューリタン研究』，日本基督教団出版局，1981年。

THE HERITAGE OF PURITANISM IN AMERICA

Yoshitaka Yamamuro

After landing on New England from Old England, the birthplace, Puritanism had to face many hard problems in the religious and social organization policy within a different circumstances of the colony. The signs of change of American Puritanism can be seen from its early stages, and the process of change of the Puritanism as a system of religious dogmas was inevitable. Although, we find the influences of the ethos of Puritanism in modern American thought; the term used here, the ethos, should be understood as an imprint of the moral function of a religion which practically influences people's mode of life. Indeed the Puritan religion has declined, but the imprint is still alive basically unchanged. This thesis concerns the ethos that I conclude to be the heritage inherited from Puritanism.

(1) First, the ethos involves the attitude which attaches importance to the verification of truth through practical action. The Puritan required verification of his redemption by God through practical action. Therefore he came to attach importance to that verification.

(2) Secondly, the ethos involves the attitude which esteems rationality though human reason is not looked upon as an absolute. For the Puritan, practical action to verify redemption by God must follow the will of God. He did so rationally. Therefore he esteems reason. In this case, reason does not mean scientific reasoning but rationality based on interpreting the Bible.

(3) Thirdly, the ethos concerns the attitude which disapproves fixed truths and values in the process of searching for the truth. For the Puritan, the only God is absolute. He believes in nothing absolute but God. And he does not believe that he knows anything perfectly. However, he must understand the will of God to govern his actions. Therefore he is constantly searching for the will of God, the object of the truth.

(4) Fourthly, the ethos concerns the attitude which opposes any authority in the world and thinks highly of the independence of the individual. The Puritan believes that the only God is absolute. So he repudiates idolatry of the creature. He thinks that all men are equal under God. Therefore he opposes all human authorities, and depends upon no one but God. He becomes an autonomous man and an independent individual.